

インド滞在記 (その 1)

1 月 22 日、インド北部の地方都市において建設中だった国内最大級のヒンドゥー教寺院が完成し、モディ首相などの与党幹部が出席した落成式が盛大に行われたとの報道がありました。映像では、インドのウッタルプラデシュ州アヨーディヤーという都市に建設中だった巨大なヒンドゥー教寺院に集まった多数の市民を前にモディ首相が演説する姿が映し出されていましたが、寺院の周囲に夥しい数の人が集まっている様子はいかにもインドらしく、ヒンドゥー至上主義を標榜するインド人民党 (BJP) の党首でもあるモディ首相の面目躍如だったように見受けられました。また、それより少し遡った 1 月 12 日には日本の円借款によりムンバイで建設中だったムンバイ湾横断道路でインド最長となる海上橋梁 (全長 22km) が完成しました。最新テクノロジーが詰め込まれた橋梁だそうですが、その開通式にモディ首相や日本大使が出席している様子が報道されていました。このところ、インドのメディアへの露出度は高く、存在感が増していることが窺えます。これらの報道に接して、久々に同地に在勤していた当時を思い出しました。

ということで、今回は筆者のインド滞在時の雑感をお届けしたいと思います。インド在勤中の 3 年間は、大国インドが発するエネルギーに圧倒され続けてあっという間に過ぎた時間だったというのが正直な実感ですが、これまでインドのことはこのコラムでも断片的に綴ってきましたので (「家のはなし (第 51 回)」や「海外生活のトラブル (第 36 回)」参照)、今回は当時の仕事のことなどを中心にお話します。

インド基礎情報

インドを訪れたことのある方にはご存じのことかもしれませんが、ここで簡単にインドについて統計の数字を基におさらいをしておきます。

まずは人口について。2023 年に中国を抜いて世界 1 の人口になったことがニュースで大きく報じられていましたが、世界銀行が公表している 2022 年のデータによれば、インドの人口は約 14 億 2 千万人、人口増加率は年 0.7%、14 億人を超えて今なお増加し続けています。

国土は日本の約 8.7 倍の約 328 万 7 千 km²、国土の周囲は北部で中国、ネパール、ブー

タン、東部でバングラデシュ及びミャンマー、西部ではパキスタン及びアフガニスタンと国境を接し、南部ではインド洋を挟んでスリランカやモルディブ、インドネシアと領海を接しています。

気候も広範な国土を反映して、北部ヒマラヤ山岳地方の氷河気候から西部の乾燥砂漠気候、南部の湿潤熱帯気候など多様性に富んでいます（ヒマラヤ地方では、登山家にも有名な K2（パキスタンも領有権を主張）やカンチェンジュンガなど世界最高峰の山々もインド領に属しています）。首都ニューデリーでは、夏場の最も気温の高い時期（5月から6月）には気温が45℃を超える日が連日続きます。

インドが、植民地支配をしていた宗主国の英国から独立したのは1947年8月。同時に、イスラム国家のパキスタンが分離独立を果たし、その後カシミール地方の帰属問題で印パ戦争が起き、現在まで解決はしていません。ちなみに、パキスタンはイスラム国家として現在のパキスタンとインドの東側にあった東パキスタンによって一つの国家を形成していましたが、1971年に東パキスタンがバングラデシュとして独立しました。

インドの国家構成は、29州および7の連邦直轄領で構成される連邦国家です。連邦公用語は、ヒンディー語と英語、その他州レベルの公用語として21言語が公認されています。

多宗教国家であることもインドの特徴で、2011年のインド国勢調査によればヒンドゥー教徒79.8%、イスラム教徒14.2%、その他キリスト教徒、シク教徒、仏教徒、ジャイナ教徒などとなっています。ちなみに、イスラム教徒は少数派に属しますが、それでも約1億7千万人を超える数で、イスラム人口としてはインドネシアについて世界第2位の国となっています。

経済成長率は、世銀統計（2022年）によれば7.2%ですが、直近2023年第4四半期（10月から12月）だけを見れば8.4%と主要国（G20）の中で最も高い伸びを示しています。最近のニュースで、日本のGDP（国内総生産）がドイツに抜かれて世界第4位に落ちたことが話題になりましたが、日本のすぐ後ろにはインドが迫ってきており、2025年にも日本を抜いて第4位になる可能性も見えてきているようです。グローバルサウスの牽引役としての本領を発揮し始めたということでしょうか。

世界遺産は、文化遺産が30、自然遺産が7となっています。皆さんご存じのタージ・マハルも、もちろん世界文化遺産です。

進出日系企業数は、外務省が調査を行った2022年10月現在の数字では、インド全域で4,901社となっています。特筆すべきは、日本の自動車メーカーであるスズキが1981年に現地に進出して以降、同社がインドで生産・販売する自動車のインド国内シェアは50%近くを維持し続け、断トツの1位を誇っており、昨今では近隣諸国への輸出も手掛けていることです。

在留邦人数は、外務省統計によれば2023年10月現在で8,197人の邦人が長期滞在しており、その大多数は企業駐在員及びその家族となっています。

一方、日本に長期滞在するインド人数は、法務省統計によれば2023年6月現在46,262

人で、8年前の2015年との比較で約65%増と高い伸びを示しています。昨今の在留外国人数の増加はインド人にも当てはまるようで、日印関係の深化を感じます。

“インド”への着任

インドという国については、ドイツからの転勤前にネットや文献などからそれなりの予備知識の入手に努めたつもりでしたが、大国であることは理解できたものの、いったいどんな国なのか、なかなかイメージが湧いてこないままでした。ベルリンから、パリ経由エールフランス機で夜10時頃に到着しニューデリー国際空港に降り立ったのは2013年2月末のこと。当時、2年前に竣工したばかりという近代的で立派な空港ターミナルビルの構内は、イミグレーションを過ぎて荷物の出てくるターンテーブルに辿り着くまで何故か閑散としており、これが人口13億人（当時の数）という大国の首都の空港なのかと思うほどに人が少なく、いささか奇異な光景に映りました。迎えに来てくれた大使館の派遣員にそのことを尋ねると、「警備上の理由から一般人の空港ビル内への入構を当局が禁止している。ビルの外に出てみればどれ程の人がいるか分かりますよ」とのこと。その言葉通り、荷物をピックアップしてターミナルビルを出てみると出入口のドアの前には銃を持った軍人と思しき警備員が配置され、その周囲には深夜にもかかわらず千人以上はいるのではないかと思われるほど多数の人で溢れ返っており、「タクシー、タクシー」と連呼しながら何人も客引きが寄ってきました。それらの声を振り切り、人の波をかき分けて大使館の迎えの車に乗り込むまでが一苦勞でした。空港で何人もタクシーの客引きに囲まれたことは、過去に出張で訪れたバングラデシュのダッカ空港やネパールのカトマンズ空港でもありましたが、南西アジアの国に特有な情景なのかなと昔を思い出していました。

空港から滞在予定のホテルへ向かう途中では、更なる衝撃が待っていました。高速道路を下りて一般道路に入った途端、いきなりクラクションの音がそこから聞こえてきます。よく観察してみると、片側3車線のはずの一般道路を車が5列になって走っており、隣の車線(?)の車との間隔は50cmもありません。交差点では、四方から車が侵入して一見すると無秩序状態に見えましたが、運転手はここを難なく脱出。この光景を目にしては、インドで運転しようという気持ちも一瞬にして萎えてしまいました。

ニューデリーの大使館街

ニューデリーは、1900年代初頭に当時英国領インドの首都をカルカッタ（現在の名称コルカタ）からデリーに移転した際に、現在オールドデリーと呼ばれるデリー市街地の南に首都機能を持つ都市が建設されたのが始まりとされています。ただ、都市の呼称は様々あって、デリー首都圏全体を指す“デリー”や首都機能が集まる地区を含む行政区画を指す“ニューデリー”という呼び方がありますが、インド政府の公式発表や国連

では首都はニューデリーとの表記になっていますので、ここでもニューデリーとします。人口は出典によっていろいろな数字が出ていますが、デリー首都圏全体で 2,000 万人から 2,200 万人くらいといった規模、面積は 1,484 km²と東京都の 70%ほどですので、いわゆるメガ・シティです。

日本大使館は、G7 を始めとする主要国の大使館の多くが集まっているチャナキャプリー (Chanakypuri) と呼ばれる大使館街にあります。チャナキャプリー地区にある各国外交使節は、日本大使館周辺だけでもドイツ、フランス、米国、イタリア、スイス、スウェーデン、ポーランド、中国、ロシア、スーダン、エチオピア等の大使館及び英国、カナダ、オーストラリア、パキスタン等の高等弁務官事務所があります。ちなみに、インドは英連邦の一国であり、英連邦に属する諸国の外交使節団は大使館ではなく高等弁務官事務所ということになっています。高等弁務官 (High Commissioner) とは、植民地時代に本国 (宗主国) から派遣される施政のトップ (責任者) のことで、現代でも英連邦諸国間における外交使節にはこの名称が使われています。植民地時代の名残と考えられますが、その権能は大使と同義です。

チャナキャプリーに事務所を構える外交使節は、それぞれが広大な敷地を有しています。例えば、日本大使館は 200m×250m ほどの敷地の中に大使公邸と庭園、総勢 100 人以上が働く大使館事務所、2 面のテニスコートと屋外スイミングプール、屋外駐車場などが完備されており、敷地だけで見ればそれまでに勤務したどの国の日本大使館と比べても断トツの広さでした (大使館の敷地と建物は日本の国有財産)。ただし、日本だけが特別広かったというわけではなく、日本大使館に隣接しているドイツやスーダンを含め、この地区に構える各国の外交使節は押しなべて広い敷地を有していました。ちなみに、米国大使館や旧宗主国の英国高等弁務官事務所は、筆者が広いと感じていた日本大使館の約 2 倍以上の敷地があり、それぞれの事務所に近接してアメリカンスクールやブリティッシュスクールも設置され、さすがこの 2 つの国は別格だったという印象を持ちました。特に、米国大使館領事部とは良好な関係にあって何度も訪れていましたが、訪問する都度敷地の広さと警備の厳重さに、米国の存在感を肌で感じたものです。

少し脱線しますが、東京にある主要国大使館も広大な敷地を有していることでは定評があります。在京大使館の場合、G7 各国を始めとする主要国の大使館が現在の場所になった時期は、明治期からの場合もあれば第 2 次大戦後に設置された場合など、それぞれの国の立場 (戦勝国、敗戦国の違い、国交樹立の時期等) によって異なりますが、多くは旧大名屋敷や華族、戦前の政治家等の屋敷跡地を日本政府にオファーされたことで、都内の一等地に広大な敷地を有することになっていったようです。

今回は、インド在勤中に忙殺されることになった領事業務、さらには最も勤務時間を割かれることになった邦人援護のうち印象的な事案についてお話しします。

つづく

(公財) 栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人 (略歴)

1977年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国(英国)大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の9公館で計29年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に2019年3月退官。同年5月より現職。